

小説どもが夢の跡

ちくSUN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今まで考えた小説の設定などの供養のため、短編集の様な形で投稿しようと思いまし
た。連載小説としてするかはわかりませんが、感想などもらえたなら嬉しいです。
タグは基本保険です。

目 次

神が殺されたこの世界

神が殺されたこの世界

神が殺されたこの世界

設定

5 1

ノンフィクション・ファンタジー

ノンフィクション・ファンタジー

10

神が殺されたこの世界

鬱蒼としげる森の中。草が踏まれ折れる音と、怒号。足をもつれさせながらも、必死に少女は逃げていた。

「はあっ……はあっ、いつまで追つてくるのよ！」

少女は息を切らせ、今にも足を止め倒れそうになりながらも、悪態を突きつつ走り続ける。彼女は何でも屋のようなことをしながら、お金を稼ぎ、そのお金で旅をしていた。しかし、ある村で『法国』の肅清軍に魔法使いとして売られ、追われているところであつた。

『法国』は、魔法を人の身でありながら傲慢にも神の御技を真似しようとした邪法としている。そのため、魔法使いを捕まえるため肅清軍を各国に派兵しているのだ。また、魔法使いに関する有力な情報や、魔法使い本人を捕まえ、肅清軍に提供すれば、報奨金がもらえるのだ。今回は村の貧困をなんとかするために、その報奨金目当てで魔法使いの烙印を押され、売られたのだ。

「……はつ、は、もう、ダメ」

少女の体力が尽き、どうせ逃げきれないのだから諦めて捕まってしまおうかと考えた時。どこからか、鈴を鳴らしたかのようだ、透き通った、それでいてどこか重みを持った声が聞こえてきた。

「なんだ、せっかくここまで逃げたのに、諦めるのか」

その声には、疲れでよく回らない少女の頭にもはつきりとわかるほどの失望が含まれていた。

少女はその声に対し、諦めと同時に目と頭が熱く感じるほどの強い怒りを感じた。自分がどれほどの時間、どれほどの距離を逃げてきたのか、今までに積み重ねてきたことのどれほどが無駄になり、泡と消えたのかもわからぬいくせにと大声で叫び怒鳴ろうと思いつつ、息を大きく吸つた。

そして、そのまま地面に膝から崩れ落ちた。もう既に彼女は気力だけで立つて、逃げていた。そこに、強い怒りで精神が揺れ、息を大きく吸つたことで身体が疲れ切つてしまふ。休憩を求めていることを思い出してしまうのだ。

「おや、邪魔をするつもりは無かつたのだが、最後の一押しをしてしまつたか申し訳ない」

その声には、少しの申し訳なさもこもつていなかつた。

「おつ……やつといたか、全くここまで逃げんだよ、隊長！　ここに居ました！　体力も

尽きたようで倒れています！」

遂に、肅清軍に追いつかれてしまった。兵士は少女を取り押さえ、隊のところまで引きずつて運ぼうとしている。もう腕にも足にも力が入らない。抵抗しようにも、立ち上がりすらしない。

少女はもうどうしようもないのかと、諦め、目を閉じようとした時。先ほどまで聞こえていた声を思い出した。

「助けて！ もしこの状況をなんとかできるなら私を助けて！ もし助けてくれたのならなんでもするわ！ お金だってある、旅をしてきたからいろんな場所も知ってるし、人も紹介できる！ だから！ お願い、私はまだ、死にたくないの……」

少女は限界まで息を吸い、今、自分が唯一できることを考え、そして実行した。誰かはわからない、助けてくれる保証もない。むしろこの状況で自分がいることをバラされ恨まれるかもしれない。それでも彼女は大声で叫んだ。

「なんだ、近くに誰かいたのか？ こんな状況で助けてもらえるわけないだろうが、馬鹿じやねえのか？ まあ近くにもう1人いるんなら、そいつも魔法使いつてことにして連れてつてもいいかもな、証拠作るのも1人も2人も変わらないしな」

兵士の男は、少女を馬鹿にする様に鼻で笑いながら言つた。肅清軍は少女が冤罪で魔法など使えないのはわかつていた。それでもなお、自分達の功績のために、そして、捕

まえてから処刑するまでの間に遊ぶために捕まえようとしていたのだ。

少女もまさか、肅清軍が冤罪だと分かった上で自分を捕まえようとしていたとは思つてもいなかつた。しかも、自分が巻き込んだとはいえ、助けを求めただけの相手を、魔法が使えるかどうか、助けに来るかすらわからないのに、魔法使いとして捕まえると言い出したことに驚愕した。

少女がなんとか、声の相手だけでも流されられないかと考えていたちょうどその時だつた。

「冤罪だつたのか、なぜ魔法を使わないのか疑問に思つていたんだ。何か特殊な条件で組んでいるのか、それともこれ以上は使えないほど既に使つた後なのだろうかと」

そう言いながら現れたのは、2冊の本をベルトで腰に留め、どこか制服の様な印象を受ける服の上にローブを纏い、そこに旅をするためのブーツを履いた奇抜な格好をした15歳ほどの綺麗な茶色の髪を腰まで伸ばした少女だつた。

神が殺されたこの世界 設定

魔法 :

人が魔法に使用できる魔力は、自分に宿っているもののみ。また、魔力を使う際には、使用した魔力が宿っていた部位も消失する。

魔法は、基本的にイメージできればなんでもできる。ただし、神話、伝承、規則性など何かしらの条件をつけていている方が、消費魔力が減る。

例：平均的な人がマッチサイズの火を灯す場合

何もなし、血液100mL分ほどの魔力

神話などに基づいた儀式で、血液10mL

法則を決めて魔法陣や詠唱して、血液5mL

併用して、血液1mL

魔力は、部位により、人により、体調により、宿っている量が違う。

魔力は、体から離れてても宿り続けているので、魔法使いは、健康な時に血を抜いて、一定量ずつ試験管などに保存していくたりする。

一般的な人が全身を消費した場合、その時の感情の強さや、決意、状況により魔力量、魔法変換効率が変わる。

主人公(○) 内は元の体の内容

名前：

性別：女（男）

身長：145.2cm（177.3cm）

年齢：13歳（26歳）

体重：41kg（72kg）

好きなもの：平和、妹

嫌いなもの：戦争、宗教

見た目：茶髪、茶色の目、白人系の肌色、胸は小さい、ズボンを好んで着る、スカートは履いてもロングのみ

学歴：初等学校卒業、中等学校3年、兄に魔法について教わっていた

(初等学校卒業、中等学校卒業、高等学校魔法学科卒業、魔法大学校魔法学科魔法法学部卒業、魔法法学部の教授のゼミに籍を置いていた、卒業論文『魔法体系の使用人数の変化に伴う魔法魔法変換効率の変化について』、卒業後教授の元で研究者として働く)

過去：宗教国家により侵略されて無くなつた、魔法の発展していた街に住んでいた。

街を攻めてきた理由は、土地を奪うため。建前としては、魔法などと言う魔の技術を使う、背信者に神による正義の裁きを与えるため。

父親は3年前に戦争にて死亡。母親は1年前からアルコール依存症状態。宗教国家の肅清軍から逃げるため、妹と街の外に出ようとしていた。しかし、町はすでに包囲されており。昔の戦争で利用されていた地下道に逃げ込んだが、あと少しのところで、後ろから法術（宗教家の使う魔法）により撃たれ、2人とも致命傷を受ける。攻撃した部隊は、致命傷でもうすぐ死ぬであろうことを確認し、地下道を戻つて行つた。

妹は、昔読んだ童話と神話の内容を組み込んだ、魔法を組み立て、兄の身体と自分とを合成し、兄の蘇生を試みたが、少し失敗してしまい、兄は自分に似た姿になり蘇生された。2人分の身体を使つたので、膨大な魔力が発生したが、術式に組み込まれている童話の内容により、余剰魔力は魔力結晶のネックレスになつた。

その後、目を覚まして身体が変わつているのに驚くが、それどころではないので、急いで地下道を通り街から脱出する。

目標：神、もしくは神の代弁者を名乗る教皇を殺すこと

初等学校：数えで7歳から4年間通う学校

基礎的な勉強を習う

中等学校：初等学校を卒業した者が試験を受け、合格すれば4年間通える学校

発展的な勉強を習う

高等学校：中等学校を卒業した者が試験を受け、合格すれば基本4年最大6年間通える学校

専門的な勉強を習う

魔法大学校・高等学校を卒業した者が試験を受け、合格すれば基本4年間通う学校、学科により受験資格が異なる

魔法学科：魔法学科卒業者のみ

魔法工学科：魔法学科及び工学科、數学科、物理学科卒業者

魔法医学科：魔法学科及び医学科卒業者

魔法考古学科：魔法学科及び考古学科卒業者

魔法学科：魔法学部

魔法技術学部

魔法法学部

魔法工学科：魔法工学部

魔法医学科：魔法医学部

魔法物理工学部

魔法医学科：魔法医学部

魔法看護學部

魔法介護學部

魔法考古學科：魔法考古學部

魔法民俗學部

ノンフィクション・ファンタジー ノンフィクション・ファンタジー

7歳ほどの身長に腰まである長い白髪、頭の横に付いているものとは別に新たに増えた頭の上の獸耳。目の色は碧色あおいろで、全体的にぷにぷにした柔らかい筋肉が付いている。それが今の俺だ。

こんな身体になつたのは、まあ自分自身の不注意とただの不幸だ。だが、全ての原因はかなり前に遡ることになる。あれは大体今から半年ほど前のことだつた。

小説家を目指し、小説投稿サイトを利用していた俺は、かつてないほどに悩んでいた。それはもうものすごい悩み様だつた。例えるなら、3年後に夢が叶い小説家になれるがそれまで一ヶ月5000円で暮らすか、そこのこしんどいが年収1000万を超える仕事につくか、今すぐ選べと言われたくらいに悩んでいた。

なぜそんなに悩んでいたかといえば簡単な話だ、小説しごくが全く書けないのだ。それはもう怖いくらいに書けない。1ヶ月考えに考え、試行錯誤しこうさくくして、アイデアを絞り出して、それでかけたのがたつたの200文字。

ファンタジー小説が好きで、小学生の頃から読み漁っていた。中学生あたりから他のジャンルにも手を出しつつ、自分のオリジナルの世界観や魔法、キャラクターの設定を考え、ノートにまとめていた。それらを総動員して、それでようやくかけたのがたつたのそれだけ。200文字なんて素人でも1日もかけずに書き終わるだろう。

正直自分には才能がないのだろうとは、初めから思っていた。ファンタジーに向いていないのかと、学園モノやミステリなんかも書こうとしてみたがこれはもつと酷かつた。

絶望した。絶望して枕に顔を埋め、深呼吸をし、むせた。深呼吸をした拍子に、枕の中の埃(ほり)を思いっきり吸ってしまいむせた。そのとき、前にネットで見たことがあるちょっとした話を思い出した。

『作家は、自分の経験したことしか書けない』

初めてその言葉を見た時は「いや、そんなわけがないだろう。それだとファンタジーを書いている人は異世界に行つたことがあって、ミステリを書いている人は、頻繁(ひんぱん)に殺人現場に居合わせているのか?」そう思つた。だが、もしかしたら、これは正しいのかも知れない。いや、流石に実際に異世界に行つているとは思つてはいないが、その異世界での出来事を考える元となつた何かしらの事にはきっと遭遇(そうぐう)しているのだろう。

そう、俺に足りていなかつたのは経験だ。今まで小説を読み、設定を考える事に熱中

しすぎて。学校以外でまともに外出したことなど無かつた。

その学校ですら友達もつくらず、朝も休み時間もずっと1人で小説を読み、ノートに設定を書いていた。

それじゃあいくら設定を考えても、小説を書けるわけがない。当たり前だ。特にファンタジー小説なんか主人公は大体がコミュニケーションが高いのだ、俺と真逆だ。人と会話できないやつが、会話の内容なんか書けるわけがないだろう。

そうつまり、今から俺がやるべきは町に出て、なんでもいいから経験を積むこと。そしてその経験を余さずメモして、小説のネタへと変換することだ。

そうと決まれば話は早い。俺は早速出かけるために上着としてパークーを羽織り、靴を履き、町に繰り出した。

そして気がつくと森に出ていた。森と言つても、草が踏まれて自然にできたであろう道もあるし。後ろを振り返れば村のような何かが少し遠くに見える。

何があつたのか全くわからなかつた。住んでいる家の前は別に森じゃないし、扉なんか周りを見渡しても跡形もない。ただなんとなく、このまま森にいるのは危ない気がして村に向かつた。

村に向かつて道を歩いていき、あと少しで着くところで。何者かに後ろから何か刃物を首筋に突きつけられた。

「キイエスクセ」

何と言われているのかわからなかつた。そもそも言葉が通じるかの前に、聞き取ることすら出来なかつた。

「た、たすけて……殺さないでください」

俺がその時できたのは、命乞いだけだつた。後ろの人物は何度も最初と同じことを繰り返しているが、全く聞き覚えがない。少なくとも英語では無いみたいだということくらいしかわからなかつた。

何度も命乞いをしていたら、相手も言葉が通じていない事に気がついたようで、何やら困惑した様子が伝わってきた。

「アア……アレ！ アレ！」

しばらくしたら首筋からようやく刃物を離してくれた。後ろを軽く見てみると、いかにもファンタジー世界の村民といった感じの麻でできたと思われる服を着た男だつた。当てられていた刃物は矢の先についていた鏃やじりだつたようで、矢を右手に、弓を左手に持つっていた。

アレ！ と言ひながら肘ひじで俺の背中を押してきた、おそらく進めという意味だろう。それに従い村の方に進んでいると、男は周りに何か叫んでいた。その声に反応し、周りから男と同じような格好かっここうをした男たちが3人現れた。

男たちは俺の周りを囲う形で歩き、俺はそのまま村の中に入る事になつた。